半世紀が経って・・・・・　　田中姚子

今でこそ、世を挙げての観すらある原子力へのバッシングですが、私の中で「原研時代」は、前途洋々、可能性が信じられる「光」の時代でした。　学問的、技術的、それに　この世の富に繋がる思惑まで含めての新しいものの発見や獲得を目指して、官・民・財のお歴々から、新人まで、私のように“人間大好き”な者には興味尽きない人々に出会えた場でもありました。元来、父の仕事で台湾生まれ、社宅で、日本の各地から集まった工員から重役さんまでの子供が同じ小学校に通う面白い環境と、当時の慶応大学で、テニス部のマネージャーを裏表やって卒業し、会社の宴会部長、お祭りの実行委員長だった父ゆずりのものが、原研で増幅されたようです。見事な英語の発音の嵯峨根先生、流暢ではないけれど、日本人の英語は斯くあるべき、と感服した菊池理事長。生粋のアイオワ仕込みの米語を耳にできた那須さん、米大使館と英国大使館とでは、米語・英語を使い分けられる吉田正男さん、いろいろな上司に育てられました。当時は、指導する立場のアメリカ・ヨーロッパからと、後進のアジアからの研修・見学の人々がひきもきらず、その方々の宿の手配、食事や買い物の世話、時には　ご夫人がたの案内などもしました。いちばんの思い出は舗装もしてないガタガタ道の６号国道を国際学会や見学の来訪者のバス･ツアーに、通訳として殆ど立ちっ放しで同行したこと。若かったから乗り切れた、と思います。

外国からの来客の所内の案内や、留学される方の推薦文や問い合わせ、論文の要旨の英訳のお手伝いなどなど、研究所の各部との繋がり多く、そういう折には同期の方々に会える楽しみ、助けて頂く喜びがありました。私は、人の上に立って、ものを教えたり、人を動かすタイプでなく、何か世のためになることをしている人の雑用を引き受けて、貴重な時間を少しでも確保して貰うことが自分の本分と思い定めていましたから、よき場を得たと思っていました。

田中隆治クンと１９５８年に結婚しました。実は、大学時代からの付き合いでして本当は別のメーカーを希望していたのですが、どこも最後の健康診査で結核の既往症があることではねられ、たまたま公募が入っていた原研では、人事課に既往症モチの方が何人かおられて入ることができた、というナミダの裏事情があるのです。６１年に長女が生まれ、子供好きな私は、なんとしても自分で子育てを楽しみたいと思い、でも仕事も続けたいと切望し、休職を願い出たのですが、当時は「先例を作られては困る」とニベもなく断られ、６３年に二女誕生、専業主婦をしていました。その間も、国際会議などの人手の要る時とか、学者さんのご夫人のお相手などのアルバイトを外国課でさせて下さいました。二女が生まれた頃、愛知県で母子寮の寮長をしていた母を引き取り、荒谷台の長屋（和風住宅）で暮らし、後に、長堀住宅に移りました。

１９６７年頃だったかと思いますが、隆治が構内で急に右折した業者さんの車に後ろから突っ込んだとか、診療所に急ぎ駆けつけたことがあり、死なれたら一家を支えなければ・・・と真剣に考えたのでしたが、そんな折、竹腰女史が訪ねて来て下さり、百田先生の核データ委員会の事務局の雑用を引き受けてほしいというお誘いを受け、母の支えもあって、また原研に通いました。ここでも、大学や企業の研究者の方々のネットワークの中でいろいろの経験をさせて頂きました。中でも、日本で開催された３０名内外のこじんまりした国際学会の事務局をさせて頂いたのは、コンパクトだけに隅々目が届くので、貴重な体験となりました。ここも、百田先生が、東北大に移られるのを機に退職しました。　この時は、私の人生の転換期でもありました。思い切って別れようと心に決め、まず　当時始まったばかりの「英検」に挑戦、一級の資格を得、新聞の求人欄でみつけた東大の原子核研の宇宙線研究室の仕事を得ました。あとからの打ち明け話では、若手は　女子大を出たての美人を断然推したのですが、教授や古手の方々が経歴を見て、即戦力でオバサンを採って下さったとのこと。原研の御蔭です。

隆治は、ホイホイ喜んでＪＰ　あたりのお嬢さんにアタックして新しい人生を歩むかも、と思っていましたら、週末に何度も戻るよう説得に来ますし、終いには、鹿児島からはるばる義父が会いに来るし・・・その頃、生きる基盤を求めて田無の教会に赴き、人間味のあるすばらしい神父さんに会い、１８０度転換した生き方をする道を選びました。人が変わるのを求める前に、まずそのまま受け容れ、自分が変わることで、新しい関係を作る道です。その頃、隆治にもお声をかけて下さる会社があって、浦和に家を見つけて下さったので、そこに戻りました。１９７４年、国道拡幅のため隆治の実家が家を壊される事態となり、自分の親とだけ幸せに暮らしては申し訳ない、と急遽大洗に家を建て、両親を鹿児島から呼び、浦和の家に娘二人と私の母、わたしは、二軒の家を往復する生活が２０年続きました。初めに８３年母が７３歳で急逝、隆治の母が二年後自宅療養の後に逝き、その１０年後に父が一週間寝たきりで、ビールを所望して、「ああうまかった、もう一杯」とお代わりをして、最後に「ワシは寝ます。」と言って文字通り眠るように亡くなりました。できることはみ～んなしましたので、とても爽やかな別れでした。大洗では、隆治の上司の土地を直接分けて頂いた上に、隣の１００坪の土地も貸して頂けたので、隆治が耕し、父がタネを蒔き、私が草や虫を取り除き、収穫する日々でした。二重生活で、両親の介護が長かったため、二人の娘は、いささかアダルト・チルドレンの傾向があり、申し訳なく思っています。

そして今度は、隆治が皮肉にも会社での健康診断の日、夜と朝の食事を抜いて診断を受け、ヒルごはんもそこそこに会議を三つもこなした後で、たまたまそこにあったお酒で乾杯をしたためか、低血糖で階段転倒事故を起し、脳挫傷で入院。１０年を経て認知症を発症し、日々寄り添って生きております。すべては自分の選んだ道です。